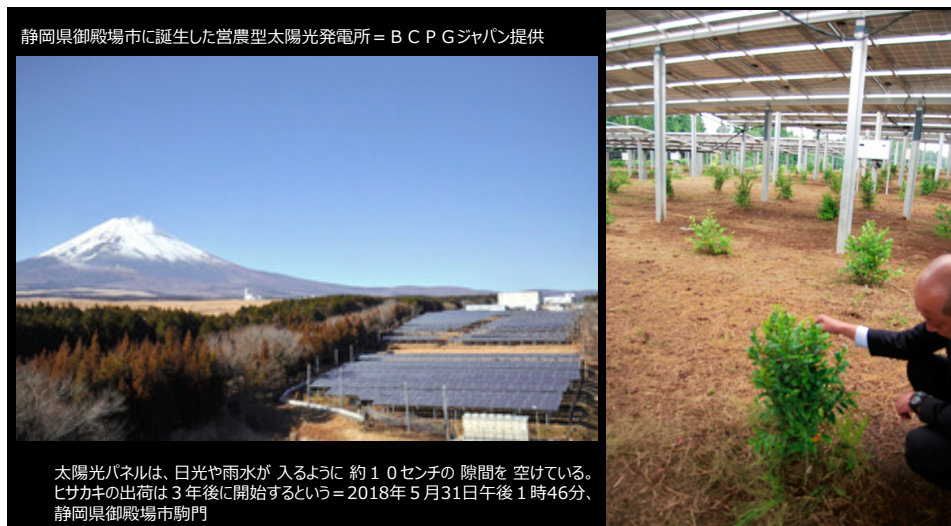


静岡）太陽光パネル下でサカキ栽培、御殿場で営農型発電

六分一真史 2018年6月22日03時00分



農作物の栽培と両立させる「営農型太陽光発電」で国内有数の規模の施設が静岡県御殿場市に建設され、稼働を始めた。事業者のＢＣＰＧジャパン（東京都港区）が発表した。発電容量は約１１００世帯の消費電力に相当する４．４メガワット。太陽光パネルの下では神事などで使うヒサカキの木１万３千本を栽培する。

ＢＣＰＧジャパンはタイの再生可能エネルギー企業の子会社。東北や九州など全国８カ所に太陽光発電所を持つが、営農型は初めてという。

同社によると、御殿場市駒門の建設地は陸上自衛隊東富士演習場に隣接する約６万８千平方メートルの農地。６３軒の農家がかつては稲作をしていたが、水利条件が悪く、多くは遊休地になっていた。地権者側から土地利用についての打診を受け、農地転用が認可される「営農型」での事業化を決め、賃貸契約を結んだ。約１万３千枚の発電パネルを約２メートルの高さに並べ、すでに４月中旬から発電所の営業運転を始めているという。

ヒサカキの枝は神事や神棚の飾りに使われる。中国産などの輸入が多かったが、神事用だけに国産品への要望も強く、需要は増えているという。日陰を好むため、太陽光パネルの下での栽培にも適している。同社では、固定価格買取（かいとり）制度での東京電力への売電とヒサカキ販売で収益を得る。

御殿場市での「営農型」は初めて。若林洋平市長は「温室効果ガスの排出削減にも遊休農地の有効利用にもつながる」と歓迎のコメントを出した。市の事業許可は、収穫が通常農地の８割を確保することを条件に３年ごとに更新される。

県農業戦略課によると、県内の営農型太陽光発電は２０１７年９月末で１４３件、総面積１８万平方メートル、総発電出力約１２メガワット。栽培作物は茶が５１件、サカキ３５件、米１０件など。農家の経営改善にもつながるため、県では今年度から太陽光パネルの下での作物の適切な栽培方法の研究を始めるなど、普及に取り組んでいる。

農家が自分の農地で発電を行う小規模な施設が多く、ＢＣＰＧの新施設は県内最大。国内でも、農林水産省の３月末時点の統計では農地が５万平方メートル超の施設は１件しかない。ＢＣＰＧの担当者は「電力の固定価格買取制度が続く２０年間は事業を続ける。ヒサカキは８０年は生きるもので、その後は採算次第で継続を検討する」としている。（六分一真史）